

僧正遍昭雑考

山下 文

公立千歳科学技術大学 理工学部

一

遍昭(弘仁七年[816]—寛平二年[890])は、様々な側面を持つ人物である¹。

紀貫之は『古今和歌集』仮名序に、「ちかき世にその名きこえたる²」歌人の一人として遍昭の名を挙げ、遍昭の和歌一七首を『古今和歌集』に選び入れた。その後、藤原公任や藤原定家も遍昭を歌仙の一人と数え、遍昭の「機知的・理知的³」とされる詠みぶりや洒脱な表現は後代の歌人たちに大きな影響を与えた。また、『大和物語』には、和歌と併せて遍昭の雅な振る舞いが描かれており、風情を解する風流人としての一面もある。加えて、「百人一首」を通して「あまつかぜ雲のかよひち吹きとちよをとめのすがたしばしとどめむ」(『古今和歌集』雑歌上・872)が人口に膾炙したこともあり、現在に至るまで歌人として遍昭の名は広く知られている⁴。

また、僧侶としての一面もよく知られている。在俗時の遍昭は、仁明天皇に近侍し深い信任を得ていたが、嘉祥三年(850)三月、三十五歳の時に仁明天皇の崩御に遭い間もなく出家する(『日本文徳天皇実録』嘉祥三年三月二十八日条)。『大和物語』などからも、遍昭の出家が当時の人々の耳目を驚かせたことがうかがわれる。出家後の遍昭は、比叡山において約十五年をかけて天台密教の修行に励み、円仁・円珍・安慧から伝授を受ける。その後、貞観十年(868)に貞明親王(陽成天皇)の護持僧となって以降、陽成・光孝天皇の庇護のもと元慶寺の座主として寺の経営に力を尽くす一方で、仁和元年(885)には僧正位にまで上りつめる。

加えて、官人・政治家としての側面も軽視できない。遍昭の父安世は桓武天皇の皇子として生まれるが、後に臣籍に下り良岑姓を名乗る。遍昭も臣下として官途を歩み、出家時には従五位上蔵人頭左近衛少将であった(『日本文徳天皇実録』『蔵人補任』)。再び宮廷に出入りするようになってからは、僧綱の一端を担う高僧として国家鎮護の任にあたっている。遍昭は僧侶としての地位を確立するにあたって、出自の良さ、在俗時から続く権門との関係などをうまく利用したことは想像に難くない。

遍昭はここに述べたいずれの分野でも成功を収めている。加えて、各分野における遍昭のパフォーマンスは余人には代えがたいものが多い。そのためか、遍昭を研究対象として取り上げる場合、遍昭の各側面を個別に扱うことが多く、それぞれの分野での姿が半ば別人物で

¹ 遍昭の俗名は良岑宗貞であるが、本稿では出家の前後にかかわらず「遍昭」の呼称で統一している。

² 勅撰和歌集所収歌の引用は、『新編国歌大観 第一巻 勅撰和歌集』(角川書店、1983年)に依った。

³ 『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、2014年)の「遍昭(照)」(増田繁夫氏執筆担当)の項目。

⁴ 歌人としての遍昭に関する研究は複数あるが、本稿では特に目崎徳衛「僧侶および歌人としての遍昭」(『日本歴史』219、1966年8月)、蔵中スミ『歌人素性の研究』(桜楓社、1980年)、川村晃生「僧正遍昭」(『芸文研究』41、1980年12月のち、『撰関期和歌史の研究』〔三弥井書店、1991年〕所収)、阿部俊子『遍昭集全釈』(風間書房、1994年)など、遍昭の閲歴に紙幅を割いているものを参照した。

あるかのように見做されてしまうことさえある。もちろん、遍昭自身も日々の生活の上で、晴と曇、公と私を切り分けていたことであろうから、歌人・僧侶・官人としての活動の跡をむやみに混同して論じるべきではない。しかし、遍昭の持つ各側面は我々の想像以上に密接に影響を及ぼし合っていたのではなかろうか。歌人としての遍昭とその和歌、すなわち遍昭の文学的側面を探究するにあたって、遍昭の持つその他の側面にも目を向けることで明らかになることがあるに違いないと論者は考えている。

とはいえ、これまで遍昭の仏教的側面や政治家としての側面が全く等閑視されていたわけではない。例えば、目崎徳衛氏は仏教が貴族化する過程で遍昭の果たした役割に着目し、遍昭の僧侶としてのあり方の特徴として、父安世の代から続く「叡山との関係」と「国家および宮廷貴族との強い結びつき」を挙げている⁵。その後、遍昭の仏教史上・天台教団史上の位置づけの究明を試みた木内堯央氏をはじめとした先行諸氏の研究により、天台僧としての遍昭の姿が明らかになりつつある⁶。また、遍昭の和歌の中には仏教的思想に基づいて詠まれたものがあることも知られている⁷。ただ、そのような和歌は出家以後に詠まれたと解されるなど、遍昭は出家後はじめて仏教的側面を獲得したと見做されている節がある。しかし、天台僧としての遍昭を論じた先行諸氏によれば、遍昭と仏教との接点は出家前のかなり早い時点にあったらしい。本稿では、このような先行諸氏によって明らかにされてきた遍昭と仏教との関係に特に着目し、遍昭の持つ仏教的側面を整理した上で遍昭の文学的側面を見ることの重要性を論じたいと考える。

二

まず、遍昭の家庭環境から仏教との関わりを確認したい。遍昭の父、良岑安世(延暦四年〔785〕-天長七年〔830〕)は、桓武天皇と女孀百濟永継の間に皇子として生をうけた。母の身分が低かったことが影響したらしく、延暦二十一年(802)、十八歳で良岑姓を賜り臣下としての道を歩みはじめる。桓武天皇は南都仏教への対抗などから最澄と空海を積極的に外護したことで知られているが、安世も日本における密教の草創期に大きな働きをしている。安世が仏教に篤かったのは、父だけではなく母の影響もあったらしい。百濟永継は藤原内麻呂の室として真夏・冬嗣を生んだ後、桓武天皇の寵愛を受け、安世をもうけた。永継はその姓からも分かるように、百濟に由来する氏族の末裔である。そもそも、日本における仏教は百濟経由で導入されたものであった。また、石井公成氏によれば、日本が仏教の範を中国大陸に求めるようになって以降も、日本国内における仏教の受容には日本に定住していた渡来

⁵ 前掲注4、目崎論文26~28頁。

⁶ 木内央「遍昭と密教」(『印度学仏教学研究』21(2)、1973年)。星宮智光「遍照の元慶寺経営とその意義」(『密教文化』112、1975年)。木内堯央『天台密教の形成——日本天台思想史研究——』(溪水社、1984年)。日下部公保「僧正遍昭 攷」(村中祐生先生古稀記念論文集刊行会編集『大乘佛教思想の研究』、山喜房佛書林、2005年)など。

⁷ 例えば、「はちすのつゆを見てよめる／はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく」(『古今和歌集』夏歌・165)、「やよひばかりの花のさかりに、みちまかりけるに／折つればたぶさにけるたてながらみよの仏にはなたてまつる」(『後撰和歌集』春下・123)などがある。

系氏族の影響が少なくなかったという⁸。加えて石井氏は、桓武帝が百済系の高野新笠の所生であることをはじめ、平安時代前期の後宮に多くの百済系の女性が迎えられていたことなどから、渡来系一族は嵯峨天皇・仁明天皇の時代に至るまで宮廷において一定の影響力を持っていたとも指摘している⁹。このようなことから、安世誕生の延暦四年(785) 当時は百済の滅亡(西暦660年)から既に百二十年以上が経過しているが、仏教徒の多い百済系氏族の末裔である永継もあるいは仏教を奉じており、それが安世の仏教への強い志向に繋がった可能性も否定できないであろう。

次に、安世自身の仏教との関係をもう少し詳しく見ておきたい。比叡山の戒壇設立に奮励した光定(宝亀十年[779]-天安二年[858])が著した『伝述一心戒文』には、その前後の経緯が詳しく記されている。そこには、天台宗の興隆の陰には藤原冬嗣・良岑安世・藤原三守・伴国道の四人の尽力があり、最澄らがこの四人を「四賢臣」「四所主」として恩義を感じていたとある。安世は廷側の窓口としての役割を果たしていたらしく、繰り返し名が上がっている。さらに、自分自身も出家の意思を持つほど最澄とその教えに傾倒していたらしい。『伝述一心戒文』(巻中)に次のような記述がある¹⁰。

良峯中納言賢尊。存生之日。恒常談語。吾心存叡嶺。欲託生仏家。者中納言賢人。攀登叡嶺。礼大師影。弟子不覺兩目之涙下於老顔。尊賢亦下兩目涙。

良岑安世(良峯中納言賢尊・賢尊)は最澄存命の折、「常に私の心は比叡山の峰にあり、仏門に生きたいと思っている」と常に語っていたという。最澄の入滅後に比叡山に登った安世は遺影を拝して涙を流したが、その様子を見ていた光定(弟子)も涙したという(『経国集』第十「梵門」「登延暦寺拜澄和尚像」参照)。

安世は比叡山にのみ肩入れをしていたわけではなく、空海とも親交があった。空海と安世の間に交わされた書簡の一部が『性霊集』に収められている。安世の往信は省略されているが、『性霊集』には空海の返信が五首(「贈良相公詩一首」「入山興」「山中有何楽」「徒懷玉」「蘿皮函詞」)採録されている。これらの詳しい内容については、渡邊照宏・宮坂宥勝『三教指帰 性霊集』や中谷征充「良岑安世に贈った詩五首」などに譲るが¹¹、特に一首目の「贈良相公詩一首」からは、二人の浅からぬ交流のほどが看取される¹²。

孤雲无定处 本自愛高峯 不知人里日 觀月臥青松
 忽然開玉振 寧異對顔容 宿霧隨吟斂 蘭情逐詠濃
 伝灯君雅致 余誓濟愚庸 機水多塵濁 金波不易従
 飛雷猶未動 蟄蚊匪開封 卷舒非一己 行藏任六龍

⁸ 石井公成「漢詩から和歌へ(一)——良岑安世・僧正遍昭・素性法師——」(『駒沢短期大学仏教論集』10、2004年10月)、39頁。

⁹ 前掲注8、石井論文40頁。

¹⁰ 『伝述一心戒文』の引用は、天台宗宗典刊行会『伝教大師全集』(別巻、1912年)所収の本文によるが、現行の字体に改めた。また、一部誤字が疑われる箇所についても訂正をしている。

¹¹ 渡邊照宏・宮坂宥勝『三教指帰 性霊集』(日本古典文学体系71、岩波書店、1965年)、中谷征充「良岑安世に贈った詩五首」(『密教文化』216、密教研究会、2006年)。

¹² 『性霊集』の詩題・漢詩の引用には渡邊照宏・宮坂宥勝『三教指帰 性霊集』(前掲注11参照)を用いたが、旧字体は現行の字体に改めた。

空海は手紙を受けたことの喜びを「忽然として開けば玉のごとくに振ふ 寧ろ顔容に對へるに異ならむや」と表現している。加えて、「伝灯は君が雅致なり 余誓ふらく愚庸を濟ふ」とあり、安世(君)には空海(余)の教を世に広めたいという思いがあったことがわかる。

このように、良岑安世は父母の影響を受け仏教に傾倒し、朝廷側に身を置く外護の人として比叡山や高野山の活動を助けていたのであるが、自らの息子を出家させてもいる。「別男子出家入山」と題する五言詩が『経国集』第十「梵門」に見える¹³。

我有一兒子 塵煩不可侵 天縱成道器 童齒拔禪心
 新負心經帙 初諳梵字音 野縫青葛衲 □□緑羅襟
 杖錫岩苔上 提瓶澗水潯 苦行何処所 雪嶺白雲深

安世自らが「一兒子」の出家を見届けているのであるから、ここで仏門に入ったのは安世の没後の嘉祥三年(850)に出家した遍昭とは別の男子である。石井氏は「雪嶺白雲深」を、「出家して雪山で苦行したと伝えられる釈尊を意識」した表現であるとともに、安世の子の出家先を示唆したものと見ている¹⁴。さらに、「心經」(般若心經)を「経王」(法華經)の誤りと見て、その場所を比叡山に比定しているが、比叡山と同様に人里離れた山中に道場を構えていた高野山に入山した可能性も否定できない。しかし、いずれにしても、安世の子息の中に遍昭以外の出家者がいたという事柄は、遍昭を取り巻く環境を語る上で看過できない事実として着目すべきであろう¹⁵。

ここまでに見てきたように、良岑氏は遍昭の祖父母にあたる桓武天皇・百濟永継から遍昭の代まで、仏教と密接な関わりを持った一族であるといえる。安世が薨じた天長七年(830)当時、遍昭自身はまだ十五歳にも満たない少年であった。とはいえ、遍昭は幼い頃から外護の檀越として尽力する父の姿を見聞きしていたにちがいない。あるいは、父から直接仏道修行の利得を説かれたことがあったかもしれない。このように考えると、仁明天皇の崩御をきっかけに菩提心を起こし仏道修行の道を選んだことは、遍昭自身にとっては、やむにやまれないことなどではなく、自然の成り行きであったことだろう。本章では、遍昭の仏教的側面は出家後にはじめて獲得されたものではないことを確認してきた。仏教に傾倒する父に反発心を抱いていた可能性も残されるが、そのような反発心も含め、遍昭の仏教的側面は出家前から培われたものといえるだろう。遍昭を理解するためには、出家の前後にかかわらず、仏教的側面を等閑視することはできないのである。

三

前章では良岑一族と仏教との関わりを見ることで、遍昭の仏教的側面が幼い頃より涵養

¹³『経国集』の引用は、小島憲之『国風暗黒時代の文学 中(下)Ⅱ——弘仁・天長期の文学を中心として——』(塙書房、1986年)の「経国集詩注」に依るが、旧字体を現行の字体に改めた。□は底本(『群書類従』原刊本)における欠字である。

¹⁴ 前掲注8、石井論文43頁。

¹⁵ 蔵中スミ氏は、遍昭以外の安世の息子として、木連・高行・長松・正直・清風・経世・晨直・晨真・晨茂・晨省を挙げている(前掲注4、20~29頁参照)。ここに挙げた10人はいずれも朝廷において官位を得ているため、安世が見送った「一兒子」は、これとは別の男子であろうと思われる。

されたものであることを確認してきた。ここからは、遍昭の仏教的側面に着目することの意義を、遍昭の出家前後のいきさつを描いた文学作品を取り上げることによって、さらに示してゆきたい。

遍昭の出家の経緯を記すものとして『日本文徳天皇実録』『古今和歌集』『大和物語』などがある¹⁶。『日本文徳天皇実録』は文学作品ではないが、歴史的事実を記した公的な「国史」の記述として、ここに先ず引用しておきたい。嘉祥三年三月二十八日、すなわち仁明天皇崩御の七日後の条に次のようにある¹⁷。

左近衛少将従五位上良岑朝臣宗貞、出家為僧。宗貞先帝之寵臣也。先皇崩後、哀慕無已、自歸仏理、以求報恩。時人愍焉。

仁明天皇の寵臣であったこと、仁明天皇を哀慕する気持ちから出家に至ったこと、そして、遍昭の出家を時の人々が哀しんだことが記されている。

次に、『古今和歌集』847番歌(哀傷歌)を掲出する。

ふかくさのみかどの御時に蔵人頭にてよるひるなれつかうまつりけるを、諒闇になりければ、さらに世にもまじらずしてひえの山にのぼりてかしらおろしてけり、その又のとしみなひと御ぶくぬぎて、あるはかうぶりたまはりなどよろこびけるをききてよめる
僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなりこけのたもとよかわきだにせよ

遍昭は仁明天皇(ふかくさのみかど)の服喪期間に世俗との交わりを断ち、比叡山に登り出家したことが明記される。そして、「みな人は」の歌が一年間の服喪明けに際して詠まれたものであると示している。

『大和物語』百六十八段は、遍昭が仁明天皇に近侍していた頃から高僧となるまでを一連の物語として記述したものである。この章段には六首の和歌(うち一首は短連歌)が含まれており、それぞれの和歌に付属している説話がつなぎ合わされて、遍昭の一代記のような体を為している。ここでは先に引用した『日本文徳天皇実録』と『古今和歌集』の内容に重なる部分を特に取り上げる。まず、仁明天皇崩御直後に遍昭が姿を消した際の様子が描かれた箇所を以下に示した¹⁸。

かくて世にも労ある者におぼえ、仕うまつる帝かぎりなく思されてあるほどに、この帝亡せ給ひぬ。御葬の夜、御供にみな人仕うまつりける中に、その夜よりこの良少将失せにけり。友だち・妻も、「いかならむ」とて、しばしはここかしこ求むれども、音耳にも聞こえず。「法師にやなりにけむ。身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてあるとも聞こえなむ。身を投げたるなるべし」と思ふに、世の中にもいみじうあはれがり、妻子どもはさらにもいはず、昼夜、精進潔斎をして、世間の仏神に願を立て惑へど音に

¹⁶ なお、『今昔物語集』『宝物集』『十訓抄』『春雨物語』等にも遍昭の出家譚が見られるが、これらは後代の人物の憶測や創作が多く含まれているため、ここでは除外した。

¹⁷ 『日本文徳天皇実録』の引用には、新訂増補国史大系『日本後紀 續日本後紀 日本文徳天皇實録』新装版(吉川弘文館、2000年)を用いた。

¹⁸ 『大和物語』の引用には、尊経閣文庫蔵藤原為家筆本を底本とする今井源衛『大和物語評釈』下巻(笠間書院、2000年)を用いた。引用にあたって、ルビや傍記などを省略した。

も聞こえず。妻は三人なんありけるを、よろしく思ひけるには、「なほ世に経じとなん思ふ」と二人にはいひけり。かぎりなく思ひて子どもなどある妻には、塵ばかりもさる気色も見せざりけり。このことをかけても言はば、女もいみじと思ふべし、我もえかくなるまじき心ちしければ、寄りだに來で、にはかになむ失せにける。

ここには、忽然と姿を消した遍昭を求めて人々が奔走するさまと、その行方についての人々の憶測が描かれている。加えて、最愛の妻に断りなく家を出た遍昭の心理について、悲しませたくないという思いと、自身の決意が揺らぐことへの恐れがあったためと言及している。なお、ここでは省略したが、上記に続けて長谷寺で遍昭と妻とが偶然居合わせたものの、そのことに気づいた遍昭が妻に声をかけずにやり過ごしたため、会えずに終わってしまうというエピソードが語られる。

そして、『大和物語』では都の人々が遍昭の確かな消息を得た時期を、仁明天皇の崩御から一年後のこととして次のように描いている。

かかれど猶え聞かず、御果てになりぬ。御服脱ぎに、よろづの殿上人河原に出たるに、童の異様なるなむ、柏に書きたる文を持てきたる。取りて見れば、

皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ

とありければ、この良少将の手に見なしつ。「いづら」といひて、持てこし人を世界に求むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむみな人知りにける。されど、何処にかあらむといふことさらにえ知らず。

仁明天皇の一周忌に諒闇明けの祓えを執り行っていると、異様ななりをした童子が柏の葉に書かれた歌を届けてくる。その筆跡と「私の僧衣の袖は未だ涙に濡れている」という内容から、遍昭が出家の身になったことを世の人々は知る。しかし、その後も居所は判然としなかつたという。先述の『古今和歌集』847番歌の詞書と比較すると、和歌の詠まれた場面としては大方一致しているが、『大和物語』では遍昭の行方を掴めずにいた都の人たちが如何にして消息を得たかを述べることに重きが置かれている。『大和物語』ではこれに続けて、雲をつかむような情報を頼りに行方を探させる「五条の後の宮」の姿が描かれている。

かくて世の中にありけりといふことを聞こしめして、五条の後の宮より、内舎人を御使にて山々たづねさせ給ひけり。「ここにあり」と聞いて尋ねれば、失せぬ。かしこにありと聞いて尋ねれば又失せぬ。え遇はず。からうじて、隠れたる所にゆくりもななく往にけり。え隠れあへで会ひにけり。

「五条の後の宮」とは、文徳天皇を生んだ仁明天皇女御の藤原順子のことであり、順子の父藤原冬嗣は遍昭の父安世の兄に当たる。諸所を巡り修行に励んでいた遍昭は、旧主の後である順子の求めさえも拒否したのである。

このように、『大和物語』百六十八段の遍昭出家譚は遍昭の出家が主題となつてはいるが、遍昭の具体的な動向はほとんど描かれていない。その中心にいるのは遍昭自身ではなく、遍昭の身の上を案じて気を揉む「友だち」「妻」「五条の後の宮」といった都の人々である。『大和物語』百六十八段が都の人々の立場から描かれているのは、そもそも、『大和物語』が和歌にまつわるうわさ話や伝承などを収めた「歌物語」であることに起因していることは、自

明のことである。ただ、ここで一つの疑問が湧く。もし、『日本文徳天皇実録』が示すように仁明天皇崩御の七日後に出家し、『古今和歌集』の詞書が示すようにその修業先が比叡山であったのなら、『大和物語』百六十八段が描くように、遍昭の行方が全く知れず人々がパニックに陥るようなことはなかったのではあるまいか。なぜなら、前章で論じたように、良岑氏と比叡山は桓武天皇や安世の代から強い結びつきを有しており、遍昭の出奔当時、世間の人々が遍昭のそのようなバックグラウンドを知らなかったとは考えがたいからである。特に、順子は安世と共に比叡山の戒壇創設に尽力した藤原冬嗣の娘であって、遍昭の消息を比較的早く得られたはずである。それでは、『大和物語』の遍昭出家譚は当時の噂を基にした虚構の物語でしかなく、勅撰の『日本文徳天皇実録』『古今和歌集』の記述こそ信頼するに足りるものだ、と片付けてよいのだろうか。論者は、『大和物語』の示す遍昭の出奔と人々の混乱状態もまた、実際の出来事の一部を伝えるものではないかと考える。その根拠として、仁明・文徳天皇の十禅師をつとめた光定の存在がある。

十禅師とは、宮中で天皇の近くに伺候し玉体安寧を祈る僧職である。最澄以来多くの天台僧が任じられており、前章で『伝述一心戒文』の著者としてあげた光定もこれを務めていた。光定の事績を記した「延暦寺故内供奉和上行状」には、「承和 皇帝召師。恒候楼内。仍彼二年補十禅師¹⁹」とあり、光定は承和二年(835)以来、天安二年(856)に80歳で没するまでの約二十二年間、仁明・文徳の二代にわたって十禅師を務めていた。一方の遍昭は仁明天皇の寵臣であり、承和十一年(844)正月から翌承和十二年正月までは六位蔵人として、嘉祥二年(849)正月から仁明天皇の崩御までは蔵人頭として天皇のそば近くにあった。二人は同時期に仁明天皇に近侍していたのである。加えて、光定にとって遍昭は大恩ある安世の忘れ形見である。このようなことから、遍昭と光定は同じ主君に仕える者同士以上の親しい間柄にあったと考えられる。比叡山が仁明天皇の崩御から間もなく遍昭を迎え入れていたならば、光定が文徳天皇とその母後の順子に遍昭の動向を伝えなかったとは考えがたい。また、当時の仏教は国家鎮護・玉体安寧を祈るものであるため、南都を含む複数の宗派の僧侶が朝廷と深い関わりを持っていた。もし、遍昭がいずれかの寺門に入っていたなら何らかの形で都に遍昭の行方が伝わったに違いない。このようなことから、遍昭は出奔後しばらくの間、平安二宗だけでなく南都のいずれの宗派の僧侶たちとも交わることなく修行に励んでいたと見るべきであろう。そのため、『大和物語』が記す遍昭の行方を捜す人々の困惑と混乱もまた、事実の一部を表すと考えられるのである。

それでは、『日本文徳天皇実録』『古今和歌集』と『大和物語』の間に違いが見られるのは何故か。それには、双方の成立過程と成立時期が大きく関わっていると考えられる。『日本文徳天皇実録』は清和天皇の勅により貞観十三年(871)に編纂が開始され、中断を挟みながら元慶二年(878)に成立した。その前年には遍昭が座主として経営する元慶寺が定額寺として認められ、元慶三年には権僧正に任じられている。『日本文徳天皇実録』が成立したのは遍昭が仏教界での地位を確立して以降のことである。また、『古今和歌集』は醍醐天皇

¹⁹ 「延暦寺故内供奉和上行状」の引用には、『続群書類従・第八輯下伝部』(改訂三版、続群書類従完成会、1958年)を用いた。

の勅により撰集が始まり、延喜五年(905)には一応の成立を見たとされている。その時、遍昭は既に世を去っており、出家騒動から約五十年を経ている。『日本文徳天皇実録』や『古今和歌集』の編纂にあたっては様々な資料が幅広く収集されたであろう。そして、遍昭の振舞いや事績が客観的に判断されたことであろう。つまるところ、ゴシップや伝承を集めた『大和物語』は和歌の詠まれたその当時の混乱状態、すなわち出奔騒ぎの顛末に照準を合わせて語られているが、国家的事業として企図された『日本文徳天皇実録』『古今和歌集』は出奔騒ぎの結末のみを事実として記したものなのである。このように、どちらの内容もそれぞれ真実が記載されているのである。

本章では遍昭の出家譚の持つ問題点を遍昭の育った家庭環境や在俗時の交友関係を視野に入れつつ論じてきた。ただ、論者が最終的に目指すところは、遍昭が生きた時代に和歌がどのように詠まれ享受されたのかを明らかにすることにある。遍昭の複数の側面に着目することは同時代の和歌文学を究明するのに有用である、ということ、最後に提示することでもって本稿の結びに代えたい。

四

現代の我々が遍昭の和歌を論じようとする場合、先ず参照されるのは、勅撰和歌集の所収歌とその詞書であり、『古今和歌集』仮名序の遍昭評(「僧正遍昭はうたのさまはえたれどもまことすくなし、たとへばゑにかけるをうなを見ていたづらに心をうごかすがごとし)である。ただ、既に述べたように『古今和歌集』が編まれたのは遍昭が仏教的側面において成功を収めた後のことであって、『古今和歌集』が描き出す遍昭の姿は、貫之ら撰者の時代の人々の基準で再構築されたものであることには留意しなければならない。歌人としての遍昭のありようを知るためには、『古今和歌集』以前にその和歌がどのように詠まれ享受されていたのかを究明する必要がある。しかし、『古今和歌集』以前の歌人のほとんどは自ら家集を編まなかった。そのため、遍昭に限らず『古今和歌集』成立以前に活躍した歌人とその和歌の実像を論じようにも、『古今和歌集』撰者の思惑が大きな壁となって立ちはだかってしまう、というのが現状である。

我々は、『古今和歌集』という壁をどのように乗り越えるかを、これまで以上に考える必要がある。ここまで繰り返し述べてきたように、遍昭には僧侶・政治家としての側面もあり、それぞれの分野で相当の影響力を有していた。遍昭の仏教的側面から遍昭の人間関係を明らかにした上でその和歌を改めて論じることは、「六歌仙時代」にどのような場でどのように和歌が詠まれたのかに迫る突破口の一つになるであろう。今後は、このようなことを志向しつつ、遍昭の和歌を改めて論じてゆく必要がある。

[附記] 本稿は、日本学術振興会科研費(若手研究)「時康親王・常康親王サロンの研究—遍昭の和歌表現を足がかりとして—」(課題番号 JP19K13057、令和1年度~2年度)における研究の一部である。